

いま野菜の流通過程で起きている事態

前に紹介したことがあるかなあ。野菜流通の中間に位置する業種で、カット屋さんと呼ばれる青果業があります。ニンジンやカボチャなどを刻みあるいは成形し、コンビニのお弁当向けなどに納める仕事をしています。

その過程で、大量の皮や端材などが副産物として発生します。そのままなら生ゴミですが、じつは牛や鶏のエサとして活用することができます。ただし大規模化された畜産経営だと、飼料成分の不安定さや「効率」の面から、導入は簡単ではないかもしれません。

そこで融通がきく小さな経営の出番です。たとえば、特注でお届けしている玉子。それを産んでいる鶏たちは、カット屋さんからもらった野菜をふんだんに食べています。

具体的には週に2回もらってきて、自家配合のエサに混ぜ、発酵飼料としています。大量にあるときはそのまま鶏舎の床にドサッとまいていきます。鶏たちが喜んでつつきまわすほか、食べきれない分は床面の敷

き料となって、最終的には田畑の肥料になります。

という循環型農業の自慢は前置きで、ここからが本題(^^);

*

先日、カット野菜のA青果の社長さんと話す機会がありました。例の中国産ギョーザの問題以降、中国からの野菜が完全にストップしているそうです。

同社で仕入れている原料野菜は、端境期に輸入品を使うていどで、国産が中心です。なので直接的には影響がないようにも思えたけど、じつはそうではありませんでした。とんでもない水準で国産の野菜が暴騰しているのです。

まだ末端の消費者価格は、それほど上がってないかもしれませんが、中間では仕入れ価格が3倍にも、ときには5倍にも跳ね上がっているとか。経営をつづけるだけ赤字を重ねている現状だということです。

これまでも“賭”のような要素はあって、相場の上がり下がりです。赤字になることはありましたが、その後



説明が後になりましたが、「里のギャラリー」はダジヤレ。あずき産地のはあちゃん(鈴木サトさん)の絵手紙のコーナーです。ご迷惑をおかけしますが、おつきあいくださいませ。

の回復でとりかえすことができ経営が成り立ってきました。ところが現在の事態は、過去とは様相がちがっているような気もすると社長さんは心配しています。

生鮮野菜が大商社の投機の対象となり、ケタちがいの金が動いて、生産・流通が翻弄されている。小さな現場の努力なんかでは太刀打ちできないよ……。

田んぼや畑と、そして店頭野菜だけからでは見えてこない話を聞くことができました。

国内農業を支える「後期高齢者」

上の記事と直接は関係ありませんが、でも明らかに関連している話題。旧・七会村(現・城里町)がご実家だというSさんからいただいた次のようなメールを紹介します。(抜粋)

“どうしてこんな世の中に…なんて嘆くだけではだめなこと分かっているのですが、すべてが政府の

「無策」にあると思うと腹立たしいばかりです。

農業のことといえば、実家では、今年も年老いた両親は米作りをやるようです。毎年「今年が最後かな」と言っているのですが。

4月6日は稲の種まきです。84歳と83歳の両親と、わが息子の会

話。「手伝いに来うよな」「うん、わかった！」

これで私たちの食べる1年間の米の保障がされるのですが…。それにしても、昨年の米価…両親も嘆いていました。”

少なからずSさんのご両親のような方々によって支えられている日本の農業。はたして、日本の食卓はどんなふうになるのでしょうか。